



2008 年 (平成 20 年)
8 月号 (No. 759)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

早期再開が待たれる

大学山岳部リーダー冬山研修会… 1
75歳、三浦雄一郎氏の登頂と
次男・豪太氏の高山病… 4
光栄の王立地理学協会メダル授賞式… 6
東西南北… 7
ウェストン夫妻の招待会
アルパイン・ジャーナルのこと
白山神駈道登山文化振興に向けて
憧れのアンデス——インカ道から
マチュピチュとワイナピチュ

活動報告… 10
図書委員会/資料映像委員会/二火会
図書受入報告… 11
支部だより… 12
北海道/青森/福井
図書紹介… 14
会務報告… 16
ルーム日誌… 17
会員異動… 17
新入会員… 17
INFORMATION… 18
さんけん通信… 19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10~18時

早期再開が待たれる 大学山岳部リーダー冬山研修会

重廣恒夫

2000年3月5日、文部省(当時)登山研修所の大学山岳部リーダー冬山研修会で、大規模な雪庇崩落事故が起こり、2名の学生が亡くなった。そのため、リーダー冬山研修会は現在も再開の目途がたっていない。運営委員でもある重廣氏に、現状を報告してもらった。

6月16日、文部科学省より「登山研修所の大学山岳部リーダー冬山研修会に係わる安全検討報告会報告書の中間まとめに関する意見募集を実施しますので、お知らせします」という6月10日付文書を受け取りました。趣旨は「平成18年(ネ)第136号 損害賠償請求控訴事件和解条項(抜粋)」5

(2)文部科学省は、安全検討会(仮称)を、原則として公開し、安全検討会(仮称)における検討内容を被控訴人らの求めに応じて被控訴人らに報告し、安全検討会(仮称)における検討結果の取りまとめに当たってはパブリックコメントを行い、被控訴人らを含めた一般国民から広く意見を求め、提出

された意見を十分に考慮しなければならぬ。公開とする場合においては、被控訴人らが傍聴できるように配慮する」に則り、登山研修所の大学山岳部リーダー冬山研修会に係わる安全検討会中間まとめ(http://www.next.go.jp/b_menu/public/main_b13.htm参照)につき、意見募集に付するものです』というもので、登山研修所長より関係者に配布されたものです。

登山研修所の存在意義

文部科学省登山研修所は昭和42年に開所され、その後夏山前進基地(剣沢)、冬山前進基地(千石)、ロッククライミング施設、トレーニング室、山岳トレーニングコース、スポーツクライミング用人工壁、低酸素室などの設備を持った

施設です。登山の健全な発展を図るため登山指導者養成のための研修訓練を行ない、あわせて登山に関する調査研究を行なうことを目的に設置された、国直轄の登山指導者研修施設です。運営については、日本山岳協会や日本山岳会も協力していますので、山岳会の会員のなかにも講師などをされた方も多いと思います。

私と登山研修所の関わりは昭和49年に始まり、58年まで大学山岳部リーダー研修会の講師、59年〜平成4年主任講師、60年〜平成8年専門調査委員、平成9年から今日まで運営委員を務めてきました。当時からの研究課題は「山岳部員の減少への対応」でしたが、同時に研修会参加者の体力や技術的なレベルが年々低下していると感じ

ました。その背景には、昭和30年代にはじまった高度経済成長により女性の社会進出が促され、その結果として「鍵っ子」と呼ばれるインドア世代の出現と「塾に子どもを預ける」というアウトソーシングがはじまったことが関係しているのではないかと推察します。

同時に大学卒業後は「会社人間」「企業戦士」「猛烈社員」と形容された勤勉なサラリーマンになり、結婚、出産という人生の節目で山登りをやめた元山岳部員も多く出てきました。その結果、部員や指導的立場にあるOBの減少が、大雪山山岳部における登山技術や経験を伝承するシステムを弱体化させ、志向の多様化により技術・体力を養成する山行日数の減少が追い討ちをかけたのではないかと思えます。

痛恨の雪崩事故

そんななかで、平成12年3月5日、大雪山山岳部リーダー冬山研修会において、研修生らが大日岳頂上付近で休憩中、40mほどの雪庇の先端から15m程度の地点で長さ約240mが崩落しました。この事故で、講師2名、研修生9名の



2005年4月の大日岳の巨大雪庇。[北アルプス大日岳の事故と事件]から

計11名が転落し、うち2名の研修参加者が、雪庇の崩落によって発生した雪崩に巻き込まれて行方不明になりました。

その後、関係者の献身的な捜索活動によって、同年5月15日、内藤三恭司さん(当時22歳、東京都立大学ワンダーフォーゲル部)、7月11日、溝上国秀さん(当時20歳、神戸大学ワンダーフォーゲル部)の遺体が発見されました。研修会の長い歴史のなかで、滑落・骨折・雪崩に埋没するなどの事故はありましたが、研修参加者が死亡に到った事故は今回が初めてでした。あらためて若くして大日岳に逝ったお2人のご冥福をお祈りしたい

と思います。

事故発生後の同年4月より秋田谷英次北星学園大学教授(元北海道大学低温科学研究所長)を座長とする「北アルプス大日岳遭難事故調査委員会」を設置、登山研修所、講師および研修生からの聞き取り調査をはじめ、事故現場の写真解析、この時期の気象・積雪分析、国内外の文献調査、雪崩崩落の力学的解析など、雪庇の形成および崩落、研修会における安全上の対策に関する調査・検討を行ない、平成13年2月「北アルプス大日岳遭難事故調査報告書」を提出しました。

報告書では「大日岳山頂付近において、前期の少雪・弱風期間にしもぎらめの弱層が形成され、後期の豪雪・強風期間に巨大な雪庇が形成されるといふ二つの事象が重なったために発生した特異なものであって、そのような雪庇の形成及び崩落を予見することはできず、山稜の想定を誤って雪庇の上に休憩することになった。このことが今回の事故の原因と考えられる」としながらも、「仮に、経験豊かな他の登山家が、当時、一般に入手できる情報をもってしても、

予見することはできなかったと考えられる。すなわち、今回の特異な雪庇崩落には、これまでの知識や経験が通用しなかったと言える」として、講師と研修生が休憩場所を誤ったと認めながらも、今回の雪庇の崩落は予見不可能であったとしました。

このことから遺族は平成14年3月、国家賠償法に基づく損害賠償を求める訴訟を富山地方裁判所に提訴しました。そして同年11月、富山県警が当時の研修会の講師であった山本一夫氏(実技主任講師)と高村真司氏(遭難者担当班講師)の2人を業務上過失致死罪容疑で富山地検に書類送検しました。日本山岳会京都支部では2人を支援するために「山本一夫・高村真司両君支援委員会」を結成し、募金運動や不起訴嘆願署名運動を開始、後に当時の斎藤惇生会長を代表幹事として「山本一夫・高村真司両君を支援する会」を組織して署名、募金活動を全国的な規模で展開することとなりました。そして、刑事事件は山本・高村両氏の嫌疑不十分、不起訴となりました。

この間に行なわれた運営委員会では私は遺族との和解と講師の地位

保全を求めました。国の主催する研修会で発生した事故について、講師に「引率責任」が生じるようであれば、講師のなり手がなくなるだけでなく、研修活動が萎縮して本来目的とする実践の積み重ねと高度な技術と知識の習得が果たせなくなるからと考えたからです。

平成18年4月26日、富山地方裁判所は原告の主張をほぼ認め、国に1億6700万円の支払いを命じました。その後、国は名古屋高等裁判所金沢支部に先の判決を不服として控訴しましたが、平成19年7月26日、名古屋高裁金沢支部において、第3回目の和解協議が行なわれ、結局、和解が成立しました。

今回の大日岳遭難事故裁判は、



雪崩の危険判別法を講習する研修生

国の賠償責任を問うために現場のリーダーの過失、判断ミスによって2人の受講生が遭難・死亡したという法的手続きを踏んだ特異なものでした。そのために山本・高村両氏が受けた精神的苦痛は計り知れないものがあります。

急がれるリーダー養成

その後、文部科学省は識者を召集して「登山研修所の大学山岳部リーダー冬山研修会に係わる安全検討委員会」を設置、6回の安全検討委員会を開催して今回の「登山研修所の大学山岳部リーダー冬山研修会に係わる安全検討会報告書中間まとめ」を提出したものです。

冬の日本海側はシベリア上空に

優勢な高気圧が発達し、西高東低の冬型気圧配置になると、大陸から寒冷な風が吹き込んで日本列島を冷やします。シベリアから吹き出した風が途中日本海を吹き渡るうちに、水蒸気を供給された冷たく湿った大気となって日本列島に吹き込んできま

す。このため北陸から北海道の日本海側では積雪が数メートルにも達するスノーベルトと呼ばれる積雪地域となります。雪雲が大日岳にぶつかり上昇することでさらに温度が下がり、運んできた水蒸気を雪として山稜に落とします。豪雪は人間の制御する能力と判断する能力を超えた自然の猛威としてわれわれ登山者に襲いかかります。

われわれ人間は長い間、自然を壊すことによって現在の文明と繁栄を築いてきました。しかし文明の利器の発達によって登山は安易化され、登山者は山という自然の恐さを忘れてしまいがちです。自然や山の観察力の欠如が山岳遭難の大きな要因となっているとするならば、今回の遭難事故は大きな教訓をわれわれに与えたこととなります。特に「大日岳事件研究会」で行なわれた多様な調査・研究や検討の成果は今後の研修会のみならず、登山者の大きな財産として今後に生かしたいものです。

「事故の検証なしに研修再開はあり得ない」という声もありますが、事故の検証については事故調査委員会や裁判を通して、また日本山岳会京都支部の調査や登山研修所

の講師研修会などで行なわれています。その総括が「中間まとめ」に集約されていると理解します。

登山は自然の猛威に曝されるスポーツです。これまでの登山の歴史を振り返っても、事故のたびにその原因について調査・分析が行なわれ、事故防止策がとられてきました。しかし、マニュアルが完備されても登山者の安全を保障することはありません。危険を予知する能力と予測される危険にどう対処するかは登山者自身に委ねられています。

登山において危険を回避し、遭難事故を未然に防止するために必要なことは、優れたリーダーのもとに実地体験を積み重ねる以外にありません。研修会で学んだリーダー達が中核的な登山指導者として成長し、登山文化醸成の担い手として山岳遭難事故の防止に貢献するというサイクルを長く途切れさせずには、これからの登山界にとって大きな損失と考えます。

亡くなった若い登山者2人のためにも、講師や研修生の保障の拡充と「中間まとめ」に則った冬山リーダー研修会の再開を望むのは私だけではないはずです。

75歳、三浦雄一郎氏の登頂と次男・豪太氏の高山病

塩田純一

二度の心臓手術を克服

5月26日、北京オリンピックの聖火騒ぎの混乱のなか、三浦雄一郎氏がネパール側からエヴェレストに登頂したのは記憶に新しい。今回の登頂は、数ある雄一郎氏の冒険のなかでも1970年のエヴェレスト・ローツェフェースのスキー滑降、1983年の南極ビンソン・マシフの登頂・スキー滑降と並び称されるべき偉業と言つてよいのではないだろうか。



2008年5月26日エヴェレスト頂上での三浦雄一郎さん
ミウラ・ドルフィンズ提供

と言うのは、雄一郎氏が自ら「後期高齢者」と語る75歳という年齢での挑戦であったばかりでなく、心臓に不整脈を抱え、運動負荷によつて命を落とす危険がありながらの挑戦であったからだ。しかし、決してただ危険な賭けをしたのではなく、飽くなき挑戦者魂による周到な準備が前回のエヴェレスト登頂後すぐに始まっていたようである。

科学的かつ計画的トレーニングと「どこまで負荷をかけたら危険な不整脈になるのか」と、自分の限界を試す実践を繰り返し、アプローチという心臓手術を行ない、また限界を試し、再度アプローチ手術を行なうといった常識では考えられない経過を経ての大成功だったと言えるだろう。これは年齢や病気により自分の限界を最初から諦めてしまうのではなく、周到な準備とトレーニングさえすれば「これだけのことが出来るのだ」ということをわれわれに

見せつけてくれた。

また今回は「MIURAチョモランマ2008プロジェクト」というタイトルでスタートしたように、チベット側からエヴェレスト登頂を計画し、最後のギリギリになつてネパール側に変更せざるを得なかった。この間、士気を落とさずいられた精神的な強さも敬服に値する。過去には計画変更が事故に繋がった事例も多く、ルート変更はわれわれにも「何も起こらなければよいが……」との心配が募った。特に聖火のためにネパール側のルートが暫く制限されたことにより、ルート上には制限解除後に多くの登山者が殺到して混乱がみられ、頂上アタック前の最高到達点がC2(6450m)と低く、不安材料が多かったと推察される。

危機にあつた次男・豪太

雄一郎氏のがんばりはもとよりだが、村口徳行氏をはじめ多くのサポート隊が活躍したことは言うまでもない。特筆すべきは常に雄一郎氏と行動を共にし、心電計などの雄一郎氏の不整脈の検査機器や治療薬など重量の荷を担ぎ、使用して雄一郎氏の健康管理を行な

つた次男・三浦豪太氏の活躍であつた。

しかし、陰でサポートに回つた豪太氏は、C5目前の8200m地点で意識が遠のき座り込むことを繰り返し、下山を余儀なくされた。その後右手足の麻痺が出現し、利き手の右手ではエイト環の操作ができず、左手でローツェフェースを下り、九死に一生を得たとの報告が、雄一郎氏登頂成功の報と前後して現地より届いたのである。

豪太氏の帰国を待つて記憶に新しいところで症状の詳細を検討するため、7月4日に日本山岳集会所にて医療委員会のメンバーを中心に検討会を開催した。

当日は三浦隊から豪太氏本人とスタッフの安藤氏が参加され、同隊とほぼ同時に同ルートを登り、医療的なアドバイスをされた山本篤隊の志賀尚子医師(医療委員)も参加、当時の状態をそれぞれの視点から報告された。症状を検討する側は、医療委員をはじめ女子医大神経内科の橋本しおり氏や山岳ジャーナリストの柏澄子氏なども加わり、熱心な討議が行なわれた。

以下に豪太氏の行動を時系列に追ってみよう。

5月24日、C3 (7300^{トレル})。食事はアルファ米四分の一、高所鍋、睡眠用酸素毎分0・5^{トレル}、荷物の重量24^キ、暑かった。

ピストル岩 (7600^{トレル}) あたりで雄一郎氏のスピードについていけなくなり、行動用酸素を吸い出した。C4 (8000^{トレル})、サウス・コル) 到着後、頂上アタックのシエルパの変更など多くの処理事項があり、多忙な夜であった。全身がだるく、今まで使ったことがない腹筋を使って呼吸したため腹部周囲の筋肉痛があり、咳き込みが激しく、痰がからみ、血の味がした。

5月25日、C4 (8000^{トレル})。起床後調子良好、排尿は少なく色が濃かった。排便あり。行動開始後、しばらくしてゴーグルのストラップを直そうとしたがうまくできず、手袋をはずして試みたが直すことができなかった。スピードが遅くなり咳き込み、行動用酸素を2^{トレル}から2・5^{トレル}に上げた。意識が遠のき座り込むことが10秒間くらい続き、意識は戻る。同様の状態が3回ほどあった。

後頭部から肩にかけての感覚がなく、目の前がゆがんで見え、両手足のシビレを自覚し、C5 (8300^{トレル}) 手前の8200^{トレル}地点で引き返す決断をした。この時酸素残量の計算ができず、交信のための周波数も分からなくなっていった。血性痰があり、咳き込みがあったが、頭痛、吐き気などはなかった。いるはずのない人が常に横に付き添って、急いで下山するようにアドバイスをしてくれた(幻覚か)。

C4に戻って酸素量を4^{トレル}に上げ、デカドロン[®]の自己筋肉注射を行なった。その後少し気分がよくなるが、そこからジェネバスパールに到るトラバースでまた意識が遠のきがちになる。ジェネバスパールからの下降でエイト環を使おうとするが右手足に力が入らず、左手用にエイト環をセットしてもらい下降に入る。下降するに従って気分はよくなり、ピストル岩で再度デカドロン[®]の筋肉注射を行ない、C3を経てC2 (6450^{トレル})まで下った。食事は取れずジュースをたくさん飲んだ。咳き込み、横になると肺がゴボゴボ音がし酸素飽和度が低下、志賀先生と相談し



医療委員会のメンバーを中心に開かれた検討会

アダラートを内服。

5月26日、C2 (6450^{トレル})。朝から利尿があり、痰がでなくなった。その日のうちにベースキャンプに下り、志賀先生の診察を受けた。意識は清明で、右手の握力低下はあるが、聴診上異常はなかった。

高地肺水腫の徴候

以上が豪太氏本人と関係者から聴取できたおおまかな症状の経過であるが、激しい咳、血性痰、起坐呼吸などから高地肺水腫は間違いないとあったと思われる。繰り返された意識障害は、呼吸器専門の増山先生の意見で、咳き込みなどの時点に起こる一過性の低酸素と考えられる。途中から出現した右

手足の麻痺は、通常では脳浮腫だけでは起こらず脳静脈血栓症など血管障害が疑われた。高地脳浮腫の存在は通常みられる頭痛・嘔吐がなかったものの、以前の報告から脳浮腫と脳静脈血栓症の相互関係が示唆されていることも含め詳細な検討が必要と思われた。

サウス・コルとピストル岩で行なわれたデカドロン[®]の自己注射、アダラートの内服なども評価されなければならぬ。また下山直後にカトマンズで施行された頭部MRI、CTスキャン、胸部レントゲンなどの資料と、すぐ近くで志賀委員が状態を診ていた貴重な情報もあり、検討に値する成果があったものと思われる。

結論は来年、高山守正先生が会長を務める日本登山医学会・シンポジウムに提起される予定である。

今回の三浦雄一郎氏・豪太氏親子の登山隊は、それぞれにドラマがあり、われわれにとっても非常に興味深い遠征であった。高所医学の発展のためにご協力いただいた豪太氏に深謝するとともに雄一郎氏のますますの挑戦に期待したい。

光栄の王立地理学協会メダル授賞式

中村 保

6月1日、ドイツのケルンから車でドーバー海峡トンネルを通過してロンドンに入りました。ドイツ語版『チベットのアルプス』ができあがったので、出版社のペドロ・デチンさんにも授賞式に出席してもらったためです。王立地理学協会(RGS)から授与されたメダルの種類・性格と受賞の経緯については、『山』5月号で神長編集長とのインタビュー記事で紹介されているので、ここでは授賞式とその後アルパインクラブ名誉会員のこと、ケンブリッジ大学訪問について付記します。

180年近い歴史を持つRGSは大英帝国の植民地経営の情報収集の拠点でした。膨大なアーカイブスは世界に類をみない規模です。ロンドンのハイドパークの前、ケンジントン・ゴアに古色蒼然たる赤レンガの本部の建物があります。ここで6月2日、年次総会の折にメダル授与式が行なわれました。現在のRGSの会長は2年前に就任した農業経済学者のサー・ゴ

ドン・コンウェイ (Sir Gordon Conway) 氏で、基調報告では世界の発展途上国が直面する食料危機と第二次緑の革命について講演がありました。メダルの受賞者は左記の4名です。

Founder's Medal Prof. Julian Dowdeswell (氷河の調査研究への貢献)

Parton's Medal Prof. Jesse Waker (海岸地形学の調査研究への貢献)

Victoria Medal Prof. Linda McDowell (社会経済学と女性の地理学の研究)

Busk Medal Tamotsu Nakamura (中国西部とチベットの山岳探検)

総会に先立ち主催者側がメダル受賞者および他の表彰者をRGSの内部に案内してくれました。この日のためにリビングストーンや南極のスコットなどの探検家の遺品が陳列されていました。授賞式は総会議事のあと1時間、会長が業績の映像をバックに受賞者を紹介し、その後受賞者に5分ほどスピー



陳列されていたリビングストーンやスコットなど探検家の遺品

ーチの機会を与えられました。私は次のような話をし、ドイツ語版を贈呈しました。

「私の未踏の東チベット探検で成果を上げることができたのは、3つの幸運が重なったお陰です。つまり、①中国登山協会はお金になる商業登山には興味をもっていないが、未踏域の探査には関心がない。②チベット探検家のスウェン・ヘディンは、彼の先生である地理学者の泰斗リヒト・ホーフェンの勧めにもかかわらず、東チベットには足を踏み入れることはなかった。③東チベットは外国人への未開放地域が多く、入域は容易ではない、などです」

総会の後はタイムスリップしたようなビクトリア朝のホールで優

雅なカクテル・パーティが催され、200名ほどの出席者と楽しい時間を過ごしました。ホール入口のメダル受賞者の名前が書かれた銘版に私の名前を発見して、あらためて受賞の喜びを噛みしめました。授賞式のあとロンドンで、もうひとつ嬉しい知らせがありました。アルパインクラブの名誉会員への推挙が決まったことを友人のマーチン・スコット (Martin Scott, Honorary Secretary) さんが伝えてくれました。来年の2月9日にはロンドンでの年次晩餐会で紹介され、挨拶をする予定です。その後、英国を代表する登山家のダグ・スコット (Doug Scott) さん、ミック・ファウラー (Mick Fowler) さんたちの自宅に招待されています。ちなみに、アルパインクラブの名誉会員は、アジアではハリシユ・カパディア (Harish Kapadia) さん、ナジール・サビール (Nazir Sabir) さんに次いで3人目です。日本人では初めてです。ロンドンの後、ケンブリッジ大学山岳会の学生に、2007年踏査行のスライドショーをしました。「チベットのアルプス」が一人歩きしています。

『アルパイン・ジャーナル』のこと

鈴木正規

世界で一番古い山の雑誌、英国山岳会の『アルパイン・ジャーナル』(Alpine Journal)の第一巻は1863年にニューカレッジの評議員であった牧師のヒアフォード・ブルック・ジョージの編集で出版された。第一、第二、第四代の編集者もみな聖職者であった。

『アルパイン・ジャーナル』が初めて世に出たその年にはスイス山岳会も誕生、1862年にはオーストリア山岳会も世に出た時代であった。

『アルパイン・ジャーナル』は創刊以来今日まで、登山史上の重要

な文献として貴重な寄稿が数多く収録されていて、会報などの文献では世界ナンバーワンの高い評価を受けている。

ところで今から30年前のことになるが、私は当時入手困難であった『アルパイン・ジャーナル』がほしくてたまらなかった。道を歩いていても、夜中に目が覚めた時でも、それを入手した空想だけで胸がいっぱいになったものだ。

当時、古い時代のヒマラヤ探検や登山を知るには、この『アルパイン・ジャーナル』が一番だった。だが、私が手中にしたのは、20年間勤務していた会社を海外登山のために退職してからだ。退職金の一部をはたいて買ったのは、1号(1863(文久3)年)〜43号(1931(昭和6)年)の43巻

の揃いであった。すべてが背皮マール装で天金造本であった。その1号を手にとってその中に引き込まれることで、半日が瞬く間に過ぎてしまったことを今でも覚えている。

こうして買い集めた思い出深い本ではあるが、自分が年老いた今、この本の将来のことを考える。閲覧してくれる人のいない孤独な立場にはおきたくない。いつそ、全部を古本屋に売って、それぞれに本当に大事に世話をしてくれる登山者の手に渡ればとも思う。そんな想いに耐えきれない今日この頃である。

白山神駈道登山文化振興に向けて

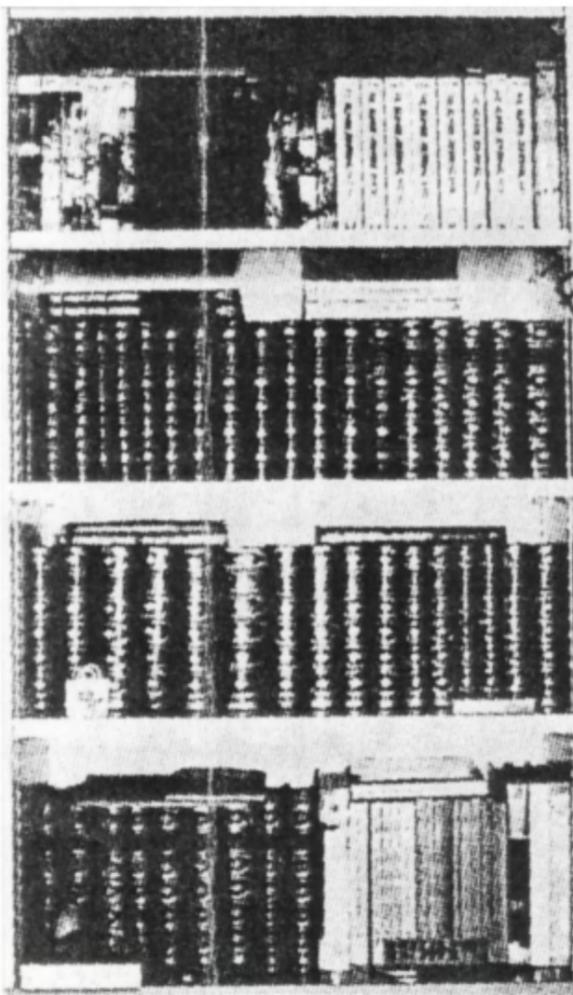
西嶋鍊太郎

白山は南北に長く連なる山脈で、北から加賀禪定道、南から美濃禪定道という由緒ある道がつけられています。しかし、その長さとは不便な交通事情から、現在この道を利用する人は減っています。

白山神駈道登山文化振興会は、多くの人にその道の良さを知って

もらいたいと次のように提唱、実施しています。

加賀禪定道^キ18^キと美濃禪定道19^キを一本の歴史と考え、両禪定道を主峰の御前峰を経由して通して歩く場合のみ、これを「白山神(加美)駈道」の名称で呼んでいます。そして、加賀祓谷登山口から御前峰を経由して美濃石徹白^{いとしろ}大杉登山口に向かう場合を「順駈け」(3225^{メートル}登って、2825^{メートル}下る)、石徹白から祓谷に向かう場合を「逆駈け」(2825^{メートル}登って、3225^{メートル}下る)と呼ぶよう提唱して紹介しています。



ずらりと並んだ「アルパイン・ジャーナル」

また、2702^{メートル}の主峰を越えて37^{キロ}の神駈道を1日で走破する場合を「荒行」、2日かけての走破を「難行」、3日かけての走破を「苦行」と区分けしています。

平成18年9月に第1回白山神駈道荒行走破大会「逆駈け」実施、参加者全員が20時間かけて歩きまわした。翌19年9月には第2回荒行走破大会「順駈け」を実施、これも20時間で歩きました。

実施の詳細は日本山岳文化学会誌『山岳文化』7・8号で紹介させていただきました。興味のある方はご覧ください

本年も9月14日、第3回白山神駈道走破大会「荒行逆駈け」を実施します。この計画に興味をお持ちで参加希望の方、送迎車・中間サポート・カンパなどの協力可能な方は、8月28日までに左記にご連絡ください。連絡いただいた方には、実施要綱をお送りいたします。

連絡先 〒920-1162 金沢市鈴見町郡家山50 白山神駈道登山文化振興会 西嶋鍊太郎

TEL 076-263-8640

ren24j@hotmail.co.jp

憧れのアンデス——インカ道からマチュピチュとワイナピチュへ

藤田純江

5月29日、参加者とガイドを含む計8名で日本をたつた。アトラクタ経由でペルーの首都リマへ。2日間の滞在中に訪れたサンドミング教会、サンフランシスコ教会の荘厳さに圧倒された。また、ナスカの地上絵は謎の遺跡だった。今でも不思議である。

いよいよインカ時代の中心都市クスコへ。上空から見たアンデス山脈は砂漠の山であった。クスコは3000^{メートル}を超す高地である。



マチュピチュの遺跡とワイナピチュ

高所順応を兼ねてインカ時代の数々の遺跡を見学した。

いよいよこの旅のメインである「世界遺産ナンバーワン」人気のマチュピチュに向けて出発。3泊4日のインカトレイルのスタートだ。私たち8名に加えて、現地ガイド、コック、ポーターなど16名が同行し、計24名となった。ここは半砂漠亜熱帯気候で、サボテンやランなどの植物にふれ、飽きることはなかった。スケールの大きい大自然の中にある遺跡の数々……インカを体いっぱい感じながら歩いた。この地域では、朝はマイナス2度まで下るが、日中は20度を越し、温度差が激しい。

高度差の大きい2600^{メートル}から4200^{メートル}の峠越えをし、2000^{メートル}まで下り、テント場へ。夜は満天の星の下、南十字星や北斗七星などを観察する。

最終日、ジャングルを抜け、太陽の門をくぐると、一気に視界が広がった。そこには写真で見慣れたマチュピチュが広がっているではないか。それはまさに世界一を実感するものだった。

翌日、全員でワイナピチュに登り、こんな高い危険きわまりない

所にまで遺跡があることに驚愕した。そして360度の大展望に、皆で喜びを分かち合った。この旅の目標達成！ 幸福だった。

翌日、チチカカ湖へ向かう。この世界一高い所にある湖に浮島があり、人々が生活している。この不思議な光景を初めて目の当たりにし、感動した。

6月11日、帰国。いろいろなことを体験し学んだ夢のような2週間であった。遠い異境に行ってきたものだ……。夢のような感動の日々を回想する今日この頃である。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

図書委員会

第37回山岳史懇談会

群馬県山岳連盟は世界最強と称され、8000メートル峰14座登頂の志半ばで逝った山田昇・名塚秀二という二人の名クライマーを輩出したことでも知られる。その群馬岳連の中心にあつて、常に強い磁場となつてリードしたのが八木原圀明氏である。

7月14日、その八木原氏に「群馬県山岳連盟のヒマラヤへの挑戦」をテーマに語っていただいた。

もともと谷川岳が、大学山岳部や社会人山岳会の先鋭的なロッククライミングの華々しい舞台として注目されながら、その谷川岳を擁する群馬の登山のスタートは一步も二歩も遅れていた。八木原氏は語る。「憧れの小暮さん（小暮勝義氏）と親しくできるのが嬉しくて、二人が中心になつてヒマラヤ

登山の準備を始めました」

群馬岳連の初めてのヒマラヤ、ダウラギリIV峰は失敗。次のダウラギリI峰南東稜では三人を失う。氏は「前回の72年に一人死なせて帰ってきたことを思うと、これでこのまま帰つたら群馬岳連は二度と立ち上がれなくなってしまう」と登攀を続行。登頂には成功するが、小暮までも失う。

氏は言う。「失敗しては痛い目に遭い、そして次に成功させるということの繰り返しでした」

以降、時にはカモシカ同人や日本ヒマラヤ協会（H A J）らと、ダウラギリIV峰、カンチェンジュンガ、冬のアンナプルナI峰などのヒマラヤへの挑戦が続く。そして映画『植村直己物語』撮影隊にも参加して、群馬から5名がエヴェレストに登頂する。

「散発的に何年かに一度ヒマラヤへ行ったところで、それほどの成

果が残せるとは思えませんが、間をおかずに続けていかないと、たいたヒマラヤ登山はやれないのではないかと思っています。初期のころは2カ月かけなければ登れなかつたけれど、続けて登ると、もっと高い山でも、難しいルートでも、短い日数で登れるようになって、それこそ最後には冬のエヴェレスト南西壁を18日で登れたわけですから。続けることが力をつけることの証明になっていると思います」

氏は続ける。「登山家ひとりひとりの力で考えると、我々は力があるなんて思っていないんです。例えば山田たちにしても三枝（照雄）にしても、それほどのクライマーではないというのが私の評価です。でもパーティを組んだ時に、ある程度の力を出せるようになったという気がしています」

山田らをマッキンリーで失った時には、さすがに「神様が私にもう山登りをやめなさい」と言っているのかと思つたけれど、なんとか最後に、次の世代のためと思つてエヴェレスト南西壁をやりました」25年かかりました。思いを持ち続けているヤツが真ん中に何

人かいて、諦めないで続けて、まああの形を残すようになるには、これぐらいの時間が必要だったんだな、というのが私の実感でした」との氏の言葉には万感の思いが込められているようだった。

参加者から、隊員の死に向き合わざるを得ないリーダーとしての思いにふれる踏み込んだ質問なども投げかけられ、中身の濃い充実した会になった。

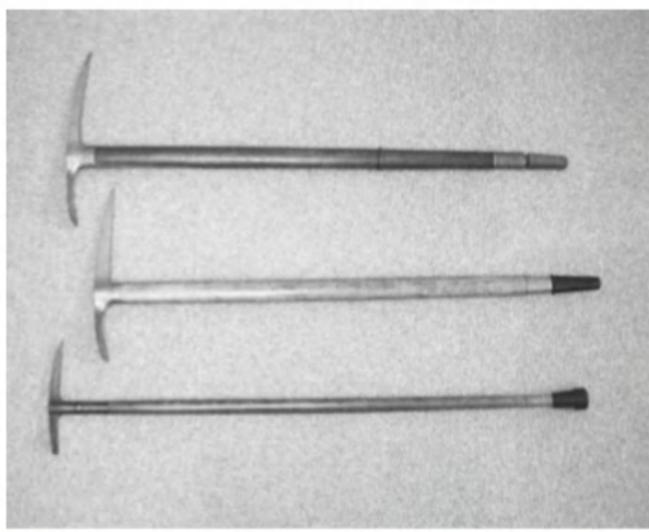
現在、八木原氏は、谷川岳ロープウェイ駅広場にこの6月にオープンした「谷川岳山岳資料館」の運営に多忙な毎日だが、この会報

が届く頃には、イエティ捜索の目的でネパールを訪れている。
(三好まき子)

資料映像委員会

今井喜美子名誉会員夫妻
愛用のピッケルが寄贈

2006(平成18)年に亡くなった今井喜美子名誉会員(101歳)と夫の雄二さん(1984年逝去)の愛用したピッケル3本が、ご遺族の雪夫さんのご厚意により寄贈された。



上から「山ノ内(1008番)」、「門田」、「製作者不明ピッケル型ストック(ピコレット)」

今井喜美子さんは、日本山岳会創立の年1905(明治38)年、埼玉県に生まれた。わが国女性登山家の先駆者の一人。昭和初期より剣岳・源次郎尾根、穂高岳・滝

谷などへの本格的登山を行なう。1971年には、夫婦でカナディアン・ロッキーに遠征。夫妻の共著には『心に山ありて』正統2冊などがある。日本山岳会では、登山、スキーの指導に尽力された。資料映像委員会でこれを受け入れ、保管することに決めた。

1. 山ノ内ピッケル(1008番)
2. 門田ピッケル
3. 製作者不明ピッケル

ピッケル型ストック(ピコレット)
(羽田栄治)

一火会

下北半島一等重点探訪

6月10日〜11日、下北半島一重点探訪の旅に出かけた。欲張って7つの一重点を目指したが、1泊ではとても時間的に無理だった。野辺地で青森支部の高橋毅会員と合流し、レンタカーにてまずは石川台一重点へ。ここは歩かずにすむが林道が長かった。次の尻屋山は会社の私有地のため入れもられないとのこと。泣く泣く引き返し、釜伏山に登り、皆で一重点をなで回す。ついでに、行ったことがないという会員のために恐山

に寄り、下風呂温泉に投宿。早朝、今回の最大目的地、大作山を目指す。マグロ漁で有名な大間を過ぎ、福浦集落から大滝沢に沿って車両駐車可能地点で下車。荒れた林道には立派なミラーが3カ所あり、まるで映画『猿の惑星』を彷彿とさせる。草が被った石コロの長い林道歩きの後、いよいよ大作山の登りにかかる。行く手をはばむ身の丈ほどのフキの大海を漕ぎ進むと、木の枝に白くあせたテープを見た時の嬉しさ。先達の心に触れた思いがした。このテープに誘われ、どんどん高度を上げていく。次第にフキはなくなり丈の低い笹となり、登山道もはつきりしてくる。ついに小雨の中、参加者10名全員登頂。刈り払われた山頂にて、きれいな御影石の一重点に对面できた喜びは大きい。

全行程約5時間の山行だったが、予備知識では「魔性の一重点」「登山道のない山」と悪い尾ひれがついている不遇の山、大作山の登頂に大満足して無事帰京。今回、残念ながら行けなかった一重点は、次の機会にまた挑戦したい。
(井上禎子)

図書受入報告 (2008年7月)

| 著者 | 書名 | ページ・サイズ | 出版元 | 刊行年 | 寄贈/購入別 |
|--------------------|--|------------|---------------|------|--------|
| 久保正人 | 四方山話Ⅲ——余談編 山の小話 | 359pp/18cm | 私家版(久保正人) | 2008 | 著者寄贈 |
| 出利葉義次 | K2 苦難の道程——東海大学K2登山隊登頂成功までの軌跡 | 290pp/19cm | 東海大学出版会 | 2008 | 発行者寄贈 |
| 羽根田治 | ドキュメント滑落遭難 | 221pp/19cm | 山と溪谷社 | 2008 | 出版社寄贈 |
| 柏澄子 | ドキュメント山の突然死 | 220pp/19cm | 山と溪谷社 | 2008 | 出版社寄贈 |
| 小山義雄 | 山の雑学ドリル | 127pp/26cm | 山と溪谷社 | 2008 | 出版社寄贈 |
| 西丸震哉 | 壊れゆく日本へ | 219pp/20cm | 山と溪谷社 | 2008 | 出版社寄贈 |
| 米川正利 | ほろ酔い黒百合——北八ヶ岳・山小屋主人のモノローグ | 287pp/18cm | 山と溪谷社 | 2008 | 出版社寄贈 |
| JAC自然保護委員会(編) | いま、高山植物が危ない!高山帯におけるシカの食害について考える | 75pp/30cm | 日本山岳会自然保護委員会 | 2008 | 当会発行 |
| 中部森林管理局(編) | 南アルプスの保護林におけるシカ被害調査報告書(平成19年度) | 107pp/30cm | 中部森林管理局 | 2008 | 発行者寄贈 |
| 中部森林管理局(編) | 希少野生動植物種保護管理事業植生復元事業実施報告書 | 110pp/30cm | 中部森林管理局 | 2008 | 発行者寄贈 |
| 土屋美弥子(編) | 山で神と出逢った——岩野暢夫写真集 | 79pp/19cm | 土屋美弥子(私家版) | 2008 | 発行者寄贈 |
| Shane Winsor (ed.) | Royal Geographical Society Expedition Handbook (New Edition) | 502pp/21cm | Profile Books | 2004 | 購入 |

支部

だより



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

北海道支部

現地追悼集会開催

昨年の11月23日、私たちは十勝連峰の上ホロカメットク山化物岩直下において、瞬時にして4人の岳友を失った。予想だにできなかった(であろう)表層雪崩の直撃を受けたものである。会員はいまだ茫然自失の感があり、思い起こしても残念な事故であり、無念極まりないアクシデントであった。

7月6日。事故から8カ月目に入ったこの日に現地追悼集会を行った。とにかく現場へ来て手を合わせたい、祈りたい、祈らずにはいられないという思いが、強く会員の気持ちにあり(あったと推測する)、ご遺族のお許しを得て追悼会を行なった。参加者は63名に達した。

朝から曇天ではあったが、雨の降る気配もなくホテル凌雲閣前の

登山口から班編成をして現地へ赴く。安政火口に入っただけで富良野岳への分岐点をやり過ぎすと現場である。歩き始めて小一時間とはかからない。

先発隊が現場付近に台座になり得る大きな一枚岩に祭壇を設けて待機。持ち寄った遺影を置くと、その周りにはアツという間に花束や故人の嗜好品で埋まる。数社のマスコミも来ている。参会者60数名が対峙すると、まさに雪崩の落下してきた赤茶けた岩肌が不気味に立ち上りだかっている。

事故発生時刻12時13分。長い黙祷から開式。支部長の追悼の辞。早く現地へ来られなかったことを詫び、この事故で各界に大きな教訓を残したこと、いろいろな形でシンポジウムが開かれてきたこと等を伝え、長年続けてきた初冬のこの地での入山が見直されるきっかけになるであろうと述べ、最後



雪崩現場で行なわれた追悼集会

にあなた達のことは生涯にわたって決して忘れないことを誓うと挨拶。その後の献花と長い祈り。そして一同心をひとつに声を張り上げ想い出と別れの歌を歌って式を閉じた。

現地での式を終え、凌雲閣での昼食会。それぞれがそれぞれの方への想い出を語る会となった。この集会在ひとつのけじめをつけたことにでもなったのか、会員諸氏の声は沈むことなく、時には快活ですらあったように思う。

支部再建に何年かかるのか。3年、5年、10年という人もいる。

しかし言えることは終生この悲しみに打ち沈んでいては故人も決して喜ばまいと思うのである。笑顔でこの地へ来ることができるとを信じよう。

(滝本幸夫)

青森支部

白神山地ブナ林再生事業

6月27日から29日、白神山地ブナ林再生事業を行なった。参加者は32名であった。

作業内容は、①二十沢の丸太橋の架け替え、②岩木山ビューポイント手前の登山道の付け替え(地面に亀裂が入り、危険性があるの面で山側に付け替えた)、③植樹したブナ周囲の下刈り、④杉の除伐などである。

今回は、「HATJ八戸」の女性の参加者も多し、ベースキャンや作業現場に女性の歓声が響き、和やかな3日間となった。

また、東海支部「猿投の森作り」から3名に参加いただいた。今後にも計画的に白神のブナ林再生事業に参加者を出す予算編成をしていくとのこと。



ブナ林再生事業で汗をながした参加者

「赤石川を守る会」からは4名の会員が日帰り参加し、ブナの下刈りの手ほどきをしてくれた。

3日間天気恵まれ、作業ではたくさん汗をかいたが、夜のベースキャンプでは白神の満天の星空を眺め、朝はクマゲラの声を久々に聞き、感動した。

食事では「ミズのギバサ和え」が好評であった。また、ハコネサンショウウオの自然産卵された「卵のう」の発見もあり、参加者も白神の豊かな自然を満喫した様子であった。
(村田孝嗣)

福井支部

第1回泰澄祭を終えて

北信越五県には、新潟県(越後)「高頭祭」、長野県(信濃)「ウエストン祭」、富山県(越中)「播隆祭」、石川県(加賀)「深田祭」、福井県(越前)「泰澄祭」がある。このうちのひとつ、白山開山の祖・泰澄にあやかる「泰澄祭」について紹介したい。

泰澄は越前麻生津(福井市)に生まれた。14歳の頃から越知山に登り修行。白山を遥拝し、養老元(717)年6月、十一面観音の夢告により白山に登頂したと伝えられる。

福井市は、平成17年6月11日、日本山岳会創立100周年の「日本真ん中五支部」の事業のひとつとして、福井市の「響のホール」で日本の百霊峰取材中の立松和平氏の記念講演と記念式典を開催した。6月10日、白山を筆者が案内し、翌日、越前馬場の平泉寺を訪れ、平泉隆房宮司と懇談した(『百霊峰巡礼第一集』に掲載)。12日、越知山への記念登山。登山口の越前町小川から行者道を歩く。山頂まで、佐々木英治氏と清水秀紀氏



越知山泰澄ウォーク・泰澄祭に70名が集う

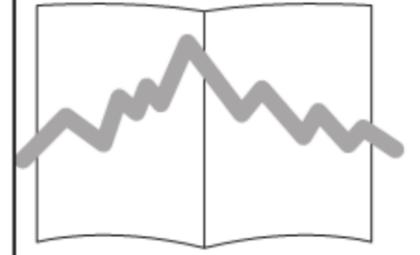
が立松和平氏に同行。日本山岳会会員も多数参加して有意義な1日を過ごした(『百霊峰巡礼第二集』に掲載)。

地元の「あさひ泰澄塾」と「あさひ山の会」が主催する「越知山泰澄ウォーク」は毎年5月の最終日曜日に開催される。その「越知山泰澄ウォーク」は、本年第20回目にあたる。その節目にあたるこの年に開催する公益事業としても意義あるものと考え、第1回の「泰澄祭」を企画実行した。

5月24日、前夜祭。入寂の地・越知山大谷寺で住職の西山良忍氏と佐々木氏の講和を受け、泰澄について勉強をした。翌25日は小雨、

ブナの幹に滴る雨水を見ながら、ブナは森林の水がめであると実感する。3時間ほどで越知山室堂広場に集合。大谷宮司の祭事で「泰澄祭」を無事に終えることができた。泰澄鍋は、70人の参加者の冷えた体を温めた。また、坂井市のゴスペルグループ「ゴスペルRSC」が「千の風になって」など、7曲を披露した。

この泰澄祭は来年以降も開催するので、泰澄ゆかりの温泉「泰澄の杜」に集ってほしい。
(宮本数男)



図書紹介



増田宏・著

『皇海山と足尾山塊』



2008年4月
白山書房刊
A5判 279頁
定価 2940円

足尾山塊は東京に近いわりには
いまだ静けさを保っている。本書
は、この山地の尾根や沢筋を克明
に踏査した記録の集成であること
もに、その自然や歴史についての
研究の書でもある。この種の地域
研究の書籍としては1988年に
出版された岡田敏夫氏の『足尾山
塊の山』『足尾山塊の沢』があるが、
既に絶版になっており、またそれ
から20年も経過しているので、屋
上屋を架す感もあるが出版した、
とのことである。

本書の著者、増田宏氏と岡田氏
は山行を共にした仲であることは、

両著書に記載があり、出版社も同
じ白山書房である。地域研究の集
大成の書であるから、多くの尾根
や沢のルートが両書で共通するが、
その記述ぶりは両者の個性を反映
して違うものとなっている。

また、増田氏の書では新たなル
ートも加えられているほか、既存
のルートも近年再登して時代の変
化に対応している。ただ、本書は
足尾山塊南端の袈裟丸山の領域に
ついては記述せず、同氏の別著『袈
裟丸山 自然と歴史・民俗』を参
照としている。

足尾山塊は近年開けたといつて
も、沢歩きや藪こぎによらなけれ
ばならないルートも多い。本書は、
今なお静寂な気分を残す足尾山塊
を目指す人にとって指針となる書
である。また、山の歴史等にも多
くのページを割いており、この山
域への興味と理解を深めるもので
ある。このような本が出版された

ことは誠に喜ばしいことである。

本書は題名で皇海山を強調して
いるが、書中でも、中学時代に初
めて見た感動から始まり、皇海山
の美しさを讃える記述は数多く、
山塊の盟主、皇海山に対する著者
の並々ならぬ思い入れと強い愛着
が感じられるのである。

(佐藤 勉)

『好日山荘往来(下巻)』

大賀壽二・著



2008年6月
ナカニシヤ出版刊
四六判 348頁
定価 2940円

307ページのものを上巻(2007年
7月出版)、『山』746号で紹介し
に引き続き、348ページに及ぶ下巻
が発行された。それは日本の登山
装備の発展とそれにまつわる人達
の記録の集大成でもある。大正13
年に西岡一雄氏が開業され、著者
の大賀氏は昭和16年に入社した。
以来、60年間を装備一筋に好日山
荘を繋いでこられた。

昭和30年前後から始まったヒマ
ラヤブームでは登山も破天荒なら、

装備も開発や輸入品などの混乱で
それ以上に大変な時代だった。そ
んななかで大賀さんは海外遠征に
必要な材料から新製品の性能まで
の調整を一人で切り盛りして、な
んとか遠征に間に合わせるとい
う橋渡しを続けてこられた。なに
しる当時はヒマラヤの気候、積雪、
気圧等の自然条件は何ひとつ分か
っていないから、それらに耐
える装備を作るのも大変だ。

大賀さんの時代には好日山荘は
大阪梅田新道近くの大阪貯蓄銀行
ビルの3階にあった。部屋の向か
いには日本山岳会関西支部のルー
ムがあつて、ルームを訪れる会員
は必ず山荘にも顔を出して、西岡
さんを中心に商品の装備をさわり
ながら談話室のような雰囲気だっ
た。藤木九三氏をはじめとして、
関西岳界の重鎮もたくさん訪れる
ので、先輩後輩の顔つなぎも図ら
れていたと言える。

さてこの著書は、これらの新し
い装備の変遷がかなり詳しく述べ
られているのは著者の立場から当
然として、それ以上に昔のことま
でを思い起こして記述されている
のには驚かされる。それらは一筋
に装備に懸けた大賀氏の抜群の記

憶力によるところが大きい。

著者は目を傷めて苦しい姿勢で執筆を続けたと聞く。にもかかわらず、装備の変遷については自分が残さなければ自分以外に書ける人はいないという使命感が著書を完成させたものであろう。

交友の広い著者は登山の先輩たちも忘れずに書き残していて、当時の岳人の気風の片鱗を知ることのできる。山という特殊な世界での交友から人はつぎつぎと新しい世界を開拓していく。この著書はそのような発展の忠実な記録であり、登山界として長く伝えられるべき資料であろう。

(阿部和行)

弘前大学医学部山岳部山の会カラコ
ルム遠征1984実行委員会・編

『GRIMO I 峰から
Yukshin Gardan Sarく
登頂から20年後の報告書』
弘前大学カラコルム遠征隊1984報告書



2007年7月
弘前大学カラコルム遠征
1984実行委員会刊
弘前大学医学部山岳部山の会刊
A4判 322頁

親しく古い会員からこの本が贈

られてきた。

この隊の特徴は10名の隊員中6名が若手の医者から構成されていて、医学部山岳部山の会が派遣母体であるという点にある。当時、カラコルムの未踏峰はあらかた登頂されて、辺境に幾つか残っているような状況にあった。そのなかでリモI峰の許可を得たのだから、幸運であったと言うべきだろう。それにしても、医学部山岳部が単独で7530^ト峰をねらい、バリエーションルート(南西壁)からの初登攀だけにその意気たるや高く評価せねばなるまい。

1984年当時、医学部山岳部単独遠征の記録としては、日本はもちろん世界にも類を見ないのではないかと思われる。しかも6月にオーストリア隊に初登頂され、7月23日に東洋大学隊が第二登、7月25日に弘前大学隊が第三登という稀に見る混みあった登頂がなされた珍しい山である。

弘前大学は、1979年テラム・カンリIII峰(7382^ト)、1983年ヒムルン・ヒマール(7126^ト)の初登頂に成功しており、もしリモI峰の初登頂に成功していたら、7000^ト峰とは言え、

ヒマラヤ三座の初登頂を成し遂げた数少ない大学山岳部になっていたことだろう。

現実は違ったが、それらの遠征を率いたのが今回登攀隊長を務めた黒滝淳二氏(31歳)である。いずこの海外遠征においても、火の玉となって計画を動かす中心人物がいるものだが、弘前大学にあってはその役割を黒滝氏が果たした。当時その黒滝氏を評して「山登り以外の人生を捨てているような気配があった」と3歳年下の安藤隊員が書いている。

山に夢とロマンを賭けた人物が1人いれば、周りの人たちも影響を受ける。そのことが更に周りを巻き込んで、遠征の実態が形づくられていく。彼らの遠征こそが、ヒマラヤへの夢とロマンを失っていく最後の大学山岳部の姿ではなかったか。

遠征から23年後に発行された公式報告書であるが、当時の隊員達の熱い気持ちが今もなお鮮やかに表現されていて、清々しい。

惜しむらくは、遠征の翌年には日本山岳会の『山岳』などに報告するとか、報告書を早く発行してもらいたかったと思う。いろいろ

な事情で無理だったことは理解できるが、故・吉沢一郎さんの口癖であった「登山とは計画して、実施して、報告するまでの一連の活動を言い、単に山に登る活動のみを言うのではない」という視点からすれば、この隊は23年間の長きにわたり登山活動を続けていたこととなる。

現在、時間に余裕の取れない第一線の立派な医師として社会的に重責を担う立場に立たれた元隊員たちにとって、当報告書が世に出るまでは、常に自分達の心の中にならなければならないかと思う。

ようやくその呪縛から開放されたであろうことを喜ぶ、とともに人々の記憶からとくに消え失せてしまった1984年という時代を振り返っているのは、新鮮な切り口と言える。その上、カラー写真も多く、文章を読みながら、素晴らしい写真が楽しめるように工夫されている。

(山本良三)



平成20年度第4回(7月度)理事会

日時 平成20年7月9日 18時30分～21時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 宮下会長、鯉坂・神崎各副会長、宮崎・吉永・成川各常務理事、齋藤・藤井・石橋・古野・堀井・相馬・山川・岡部各理事、竹中監事、近藤常任評議員、神長会報編集委員長

【委任】 太田理事

【欠席】 深川監事、日下田・河野各常任評議員

【審議事項】

1・日中韓三国学生交流登山2008-2 (吉永)

①第2回の日中韓三国学生交流登山は韓国山岳会の主管で8月17日から24日の間、韓国で開催される。参加者は前回と同様で各国学生10名、役員3名程度とする。日本からは9大学11名とコーチとして慶應義塾大学OBの森上氏が参加す

る。隊の役員は神崎副会長、吉永常務理事、宮崎常務理事が参加する。

②経費は航空運賃を各自負担し、現地での経費は韓国山岳会が負担する。なお、懇親会経費と記念品等の約26万円程度を学生部指導委員会予算ほかから支出する。(承認)

2・後援者名義使用のお願い「岩橋崇至 山の世界Ⅱ」(宮崎)

熊本日日新聞社およびIWAWA SHI ROCKIES FORUMより文部科学省の「子どもの居場所づくり」全国キャンペーン共同事業写真展「岩橋崇至 山の世界Ⅱ」(熊本市、本年10月15日～21日開催)に名義後援依頼があった。(承認)

【報告事項】

1・春の観察会地震遭遇時の状況報告(宮崎)

岩手支部事務局長小野寺正英氏より次の報告があった。

①胆沢ダム水資源のブナ原生林を守る会と岩手支部共催の春の観察会(6月14日)が現地にバスで移動中地震に遭遇し、負傷者が出た。

バックアップをどうするか等の問題があり、業者とのヒアリングをした上で検討、結果を別途報告したい。

②負傷者は8名(一般参加者は1名、山岳会会員4名で菊池支部長は全治4カ月の重症)。

4・山岳4団体三役懇談会開催日について(神崎)

③当事故は地震が原因のため山岳保険、傷害保険等は免責で、全く保険給付がない状況にあり、被災会員に対する見舞いを差し上げた。その意見が多勢を占めたので「お見舞いの募金」を総務委員会で実施する。

当番)から7月9日開催の案内が届き、当山岳会の理事会等とかが、合うため欠席の返事を出したが、あらためて7月25日に変更の連絡があった。会長、両副会長が参加する予定。

2・第一四半期の財務報告(吉永)

5・財団法人自然公園財団評議員会の報告について(宮崎)

会費収入は昨年同期に比して200万円ほど減少している。入金収入は前年同期とほぼ同額である。支出については前年同期とほぼ同じで推移している。

6・訃報(宮崎)

寄付2件あり。図書委員会から会員の図書交換会における売上金2万4014円、及び故・菅野時子(会員番号7281)氏の代理人岩村政子氏から故人の遺言として5万円(6月19日入金受領)。

永年会員No.3209 渡辺千代蔵(86歳)、6月13日逝去
永年会員No.4154 桃井昌治(78歳)、6月20日逝去

3・図書室パソコン入替(岡部)

7・公益法人改革に関する説明会(吉永)

現リース期間は8月末日に満了になるので業者から見積りを取り寄せている。他の機器との関連や

文部科学省競技スポーツ課による説明会が6月27日に岸体育館で開催された。吉永常務理事、藤本慶光評議員が出席。公益法人とす

る場合には支部の取り扱い、会計区分などクリアすべき要件が多く、今後、慎重なる検討が求められる。

8・「公益法人制度改革」に関するアンケート協力のお礼 (吉永)

財団法人公益法人協会からアンケート協力に対する礼状がきた。

9・電子雪崩遭難捜索機器の要望に関して (宮崎)

NPO法人ACTから掲題に関する要望書賛同についての礼状がきた。また、本日担当者が来会し実用に向けての諸問題等の説明を受けた。

10・A A C International Climbers Meet (神崎)

アメリカ山岳会が主催するInternational Climbers Meetに日本の若者を参加させてほしいとの依頼が中村保会員にあり、海外委員会が対応する。中村会員の推薦する2名に参加要請中。

11・会員名簿編集報告 (宮崎)

名簿作成作業は順調に進捗している。名簿を配付する段階で個人情報開示の法的要件をクリアすべく、会報『山』上で会員個々に周知徹底を図り了解を得ていきたい。

12・雪崩遭難事故「現地追悼集会」 (宮崎)

北海道支部から7月6日に実施する旨の連絡があった。

13・バイオニアワークとしての登山・探検・フィールドサイエンス—チョゴリザ登頂50周年記念シンポジウム— (宮崎)

京都大学学士山岳会から宮下会長あてに、11月3日のシンポジウムへの招待状がきた。

14・会報『山』7月号編集報告 (神長)

ルーム日誌 7月

1日 財務委員会 図書委員会
 図書管理委員会 アルパインフォトビデオクラブ
 アルパインスケッチクラブ

2日 常務理事会 集会委員会
 山岳地理クラブ

3日 学生部 高尾の森づくりの会 101会

4日 医療委員会

7日 総務委員会 海外委員会
 アルパインスケッチクラブ

8日 高尾の森づくりの会 95会

9日 理事会 山想倶楽部 休山会

10日 指導委員会 山の自然学研究会 アルパインフォトビデオクラブ

14日 図書委員会 会報編集委員会 アルパインスキークラブ

15日 自然保護委員会 山研運営委員会 ゆきわり会 00会

16日 三水会 緑爽会 101会 つくも会

17日 科学委員会

22日 インターネット小委員会

資料映像委員会 自然保護委員会 千葉支部 アルパインスキークラブ

23日 自然保護委員会 学生部 麗山会

24日 山遊会

28日 図書委員会 アルパインフォトビデオクラブ 7月来室者543名

会員異動 (7月)

物故

太田 敬 (1899) 08・7・24

山内眞行 (9149) 08・7・6

退会

古田初太郎 (3958) 岐阜

松山八郎 (7998) 岐阜

田久保や寿江 (10517)

山本健太郎 (13220) 岐阜

小沼堅司 (13710)



インフォメーション

◆プチ・オータムコンサート中止のお知らせ 山研運営委員会

会報『山』7月号でご案内しました秋の山研恒例「オータムコンサート」は、演奏者の急な海外公演のために都合がつかず、やむなく中止することとなりました。深くお詫び申し上げます。

◆山の環境問題に関する意識調査「結果は『山岳』に掲載」 自然保護委員会

本年3月に実施したアンケート「山の環境問題に関する意識調査」に、会員1900名から回答をいただきました。ご協力ありがとうございました。ご返答結果の報告については、諸種検討の結果、次のように決まりました。

- 1・『山岳』(2008年12月発行予定)に掲載
 - 2・『報告書』の作成
- より詳細な内容を報告書として

まとめ、外部に対しても公表する。発行は9月を予定しています(希望する会員には申し出により配布)。

◆白神山地ブナ林再生事業 青森支部

世界遺産白神山地のバッファゾーンの周辺で生育不良杉林地をブナ林に再生するため、除伐や植樹などを行なう。寝袋、食器必携。できればテントも各自で用意。青森空港送迎は要相談。

- 日程 9月26日(金)～28日(日)
 - 集合 26日8時、JR弘前駅城東口。または10時半、奥赤石林道ゲート
 - 解散 28日15時、奥赤石林道ゲート
 - 費用 食費1食500円
 - 定員 50名
 - 申込 9月22日までに、ハガキかメールで須々田秀美宛
- (☎)036-0103 平川市本町北柳田96-2
✉susuta@hotmail.com

◆錦秋の八甲田をまるごと楽しむ 集會委員会

軽装で歩き、最終日は酸ヶ湯の一浴で仕上げます。

日程 10月3日(金)～5日(日)

3日Ⅱ奥入瀬、4日Ⅱ南八甲田駒ヶ峰、5日Ⅱ八甲田大岳

宿泊 十和田湖温泉郷、蔦温泉

集合 3日10時50分、東北新幹線八戸駅

解散 5日18時30分、八戸駅

費用 3万5000円

定員 20名(9月10日締め切り)

申込 植木淑美まで(☎)042-734-1498

✉yoshimi-denali@jcom.home.ne.jp

*申込者に詳細を送ります

◆槍・穂高・上高地講演会

山の自然学研究会 自然保護委員会後援

当会と上高地との歴史は100年を越えた。これを記念し、原山智教授に新しい科学を講演してもらう。

- 日時 10月4日(土)14時～18時
- 場所 日本山岳会104号室
- 演題 槍・穂高超火山、梓川流路変更、上高地の自然史

講師 原山智教授(信州大学)

入場 無料(定員30名)

申込 船橋明(☎)0467-3213011

◆座談会『静かなる山』とその仲間を語る 緑爽会

今から30年前、人々の気がつかない山々を探しだし、丹念に登り続けた川崎精雄、望月達夫等5人の山仲間がいた。その当時の想いを語っていただきます。

日時 10月20日(月)18時30分より

場所 山岳会104号室

出席者 中西章、山田哲郎、横山厚夫(聞き手 横山隆)

申込 松本恒廣(☎)03-3332612892

✉tomuraushi910@yahoo.co.jp

◆「石橋崇至 山の世界Ⅱ」写真展

「ロックガーデン」40点、スライドショー、「北アルプス」20～30点を展示。自然の作った神々しき表情を余すことなく伝える。

期間 10月15日(水)～10月21日(火)

場所 熊本市鶴屋百貨店東館7階 鶴屋ホール

問合せ 熊本日日新聞社(☎)096-361-3383

●さんけん通信●

岳沢に新緑のラインが見えた!

山研管理人 内野慎一

木々の葉が繁ると、山研はいきいきとした緑の海に没します。春先、枝越しに見えていた穂高の吊尾根や六百山とは、葉が落ちる頃までお別れ。その間は2、3分歩いて穂高を見に行くことになります。河童橋の手前、白樺荘脇の一段高い土手は近くてよい展望台です。

6月、上高地の木々が枝いっぱいの若葉を広げた後、岳沢を新緑が上がっていくのに気づきました。岳沢の底は灌木帯にガレ場が交じっていますが広々としています。その灌木帯の面に、はっきりと緑の水平なラインが見えたのです。新緑のラインです! 上部はまだ冬枯れ色、下には芽吹きをやわらかな緑、そのラインは微妙なグラデーションを描きます。そして、美しいラインは毎日少しずつ山を上がり、新緑で染めていきました。

7月、岳沢の西穂寄りの斜面はニッコウキスゲの鮮やかな黄色に染まります。河童橋から肉眼ではわかりにくいのですが、双眼鏡で覗くと緑の斜面の中に黄色くなっている部分をかすかに見ることができます。

新緑のラインと黄色のライン、皆さんにもぜひ見ていただきたい光景です。

またこの季節、夕方になると思い出す光景があります。それは、薄暗い山の真ん中にポツンと灯る岳沢ヒュッテの灯りです。

昨年までは、雪害で小屋が倒壊した後も仮小屋で売店やテント場の管理などをされていたため、売店の灯りが見えました。元のヒュッテにくらべ



木々に囲まれ緑の海に没した山研

ると、小さな頼りない光でしたが、それでもしっかりと存在を示していました。あの灯りを見るとなんだかホッとしました。でも、もう今年はその見ることもできなくなってしまい、とても寂しく思います。

7月下旬のある日、この灯りの存在を再認識させられるような出来事が起こりました。夜8時過ぎ、ある登山者が山研の扉を開け「水をもらえないか」とペットボトルをさし出しました。水を汲んで渡すと、その登山者は500mlの水を一気に飲み干しました。話を聞くと、「穂高に登って岳沢を下りてきたのだが、一緒に歩いていた人が足を痛めて遅くなってしまった」「“がくさわ”で飲み物を買えると思い、その手前で水を全部飲んでしまった」とのこと。さらに、ヘッドランプの電池が切れてしまい、携帯電話の灯りで歩いて来たというのです。この登山者の行動や準備に問題はありますが、山小屋の存在の大きさを再確認しました。岳沢のあの灯りはとても心強い灯りだったのです。

この登山者を旅館の灯りの見える河童橋まで送り届けました。

登山シーズンの上高地にはたくさんの登山者が訪れます。安全と健康管理には十分留意され、自然をたっぷり楽しんでいただきたいと思います。

◆添田啓一「野菜の花写真展」

日常、食している「野菜の花」のみの珍しい写真展。

期間 9月1日(月)～7日(日)

場所 福島市コラッセふくしま5階プレゼンテーションスペース

問合せ 添田啓一 TEL 024-534-1274

◆「岩切岑泰個展」

ヨーロッパ・アルプス、ネパール、台湾、日本の風景を油彩画と水彩画40余点展示。

期間 9月29日(月)～10月5日(日)

11時～18時30分(最終日は17時まで)

場所 銀座・渋谷画廊 TEL 03-3571-0140

問合せ 岩切岑泰 TEL 042-471-5398

日本山岳会会報 山 759号

2008年(平成20年)8月20日発行
 発行所 社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビュー・ハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹
 編集人 神長幹雄
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社